

新年は旅に出ましょう!

江戸の旅

江戸時代は東海道など五街道が整備され、庶民は異文化に触れたい好奇心から「お伊勢参り」などの名目で安全な旅を楽しむようになりました。

伊勢の旅

一日何キロ歩いた?

1日 35km 歩いた。中には70km 歩いた人もいます。「歩く江戸の旅人たち」(谷釜尋徳氏)によると、一日 10 時間、35km~40km 歩いていたそうです。



伊勢神宮

箱根の険しい山道で箱根七湯「宮ノ下温泉」などの温泉地で疲れを癒しながら、2ヵ月程度かけて江戸と伊勢を往復しました。

歩く上での交通マナーもあったといえます。小田原と三島の間のように幅 3mもない道もあるので、旅人たちはすれ違いやすいよう縦列で歩きました。また武士の刀がぶつからないよう左側通行でした。

旅費を積み立て団体で旅行をした

人々は村など一定の地域で、「講」という組織をつくり、旅費を積み立てました。積立金が貯まると、旅に出る人をくじ引きで 5~10 人ほど決め団体で旅行しました(谷釜氏)。

大井川では川越え人足の力を借りましたが、水量が増えると旅の一行は足止めされました。島田など川に近い宿場が繁盛していきました。

ツアーコンダクターに勧誘されて

庶民の伊勢参りブームに火をつけたのは、旅の醍醐味を広めた神職「御師」の存在があります。御師は手代と呼ばれる営業マンを雇い、日本各地を巡回させ、伊勢参りのご利益と面白さを説きました。

庶民がいざ伊勢参宮の旅に出ると宿泊先や食事の手配までする、いわばツアーコンダクターのような存在でした(谷釜氏)。

御師たちは現金で、相応の報酬を受け取っていました。彼らは貧しい身なりの旅人でも積極的に世話をして大金を稼いでいた。

伊勢神宮以外にも熊野や三島などの大きな神社では御師たちが活発に活動していた。

出雲大社が「縁結びの聖地」になった意外な歴史

「江戸時代に出雲の御師たちが、御札を売り歩きながら宣伝したんです。男女の縁を結ぶ御利益がありますよ、と。当時は庶民が御利益信仰を求めていましたから、マッチしたんですね。消費者心理をくすぐるビジネス戦略だったといえます」



出雲大社

信者を増やし、講社と呼ばれる団体を結成し、出雲大社への団体参拝を勧誘する。さらには参拝客を自宅に宿泊させる。民宿業を兼ねた神主というわけで、「此の収入は莫大なものなりし由」だったようです。

旅籠は 7,500 円、木賃宿は 1,250 円。

旅の予算に応じて、宿泊所は様々あった。「江戸の旅の裏事情」(安藤優一氏)によると、当時の旅籠は一泊二食付きが一般的で、飯と汁に焼き魚や煮物がついた1汁2菜。旅籠は 100~300 文(2,500~7,500 円)、食事が出ない木賃宿は 50~60 文(1,250 円~1,500 円)ほどでした。一晩を共にできる「飯盛り女」を置いた飯盛旅館も人気だったようです。

江戸から伊勢への旅費

伊勢参りにかかる旅費の内訳で最も多いのは宿泊費。女郎遊びなどで遊興費もかかりますが、それが長距離歩きのモチベーションでもあり、各宿場の女郎を格付けした人もいました(谷釜氏)。現在の貨幣価値で、総額 90 万円が伊勢参りにはかかっていたようです。磯田道史先生によれば、現代感覚ではざっくり 170 万円となるといわれています。

伊勢に来た京都人の商魂

伊勢に着いた旅人を出迎えるのは、先述した御師です。旅人に手配した神楽を見せ、ご馳走を振舞いました。そんな伊勢の賑わいを京都人は見ていました。伊勢には京都の旅館業者も営業に来ていました。彼らは帰りの重い荷物を運んであげると誘って持って行きます。結果京都まで足を延ばす旅人もいました。

旅の工夫

「長距離を歩くために邪魔になる裾をまくり上げ、股引を着用するといった工夫をしていました」(谷釜氏)。

杖は休息する支えとして使われるほか、蛇を追い払うなどの武器にもなりました。頻繁に取り換えられるのが履物です。「足にきつく縛ることができる草鞋が好まれました。現地調達しては数日で捨てるのですが、地元民は旅人が捨てる大量の草鞋を回収して優れた肥料としてリサイクルしていました」(谷釜氏)



「旅行用心集」

足の疲れを取る方法として、足の疲れに効くツボなどが紹介されていました。また足の裏が痛む時には蓼の葉をすった汁を塗ると良いなどと紹介されています。また、提灯やろうそく、「熊胆」を持って行くなども紹介されています。旅館の行灯は消えやすい為、提灯、ろうそくは旅の必需品だと紹介されています。また、荷物を運ぶためには革袋や胴乱が便利だと。熊胆は食当たり用に薦められています。金銭は腹巻や胸元などに分けておくよう注意しています(安藤優一氏)。

お土産や資金不足になったら

お土産は軽いお土産が好まれましたが、重いお土産の場合は、地元へ配達してもらうサービスもありました。

旅の後半になって旅費が足りなくなったら手紙を地元へ送ると追加の旅費が送金されるシステムまであったようです。また、旅費が乏しくなった場合、道中で三味線や踊りなどの芸を披露したり行商をして稼いだりしていました。(週刊現代記事参照)